

競技会場にカラマツ材 佐久穂の「吉本」社長

熱視線

由井 正隆さん（70）

（70）

ゆ
い
まさ
たか

た」と振り返る。

後、東京都内の商社で重機の販売や営業を担当した。祖父が創業した吉本を継ぐため、1973（昭和48）年に帰郷。同社の従業員として働いた後、98年に社長に就任した。当時は木材の輸入自由化で安価な外国産木材が市場を占め、国産材のシェアが激減。林業に携わる人も減り、「かつて重要な経済基盤だった森の活気が失われ、地方から人が離れていくのを感じた直しつつあるが、まだまだ少ない」と由井さん。国産材の普及のためには「幼い頃から森で遊び、木造の家で暮らしてきた私のように、木造の学校や図書館で子どもたちが過ごすなど、

3（昭和49）年に帰郷。同社の従業員として働いた後、98年に社長に就任した。当時は木材の

割合を示す「国産材自給率」は、2017年は36・1%。02年18・8%と比べると近年持

ってきた資源が五輪で脚光を浴びるのはうれしい。有明体操競技場には、国産材の魅力を将来にわたって発信し続けてほしい」と期待している。

輪で体操、パラリンピックではボッチャの競技会場となる有明体操競技場（東京都江東区）。日本オリンピック委員会（JOOC）によると、内装、外装とも木材をふんだんに使い、東京五輪関連施設の中では木材利用率が最も高い。使われた木材は、南佐久郡や上小地域のカラマツ材だ。生産を手掛けたのは、木材加工や造林などの「吉本」（佐久穂町平林）。社長の由井正隆さん（70）は「信州産カラマツの良さを訪れた人々に発信し、国産木材の利用促進の起點となればいい」と期待する。

し、同社は認証材の加工や流通を手掛けるために必要な「COC認証」を2017年に取得。

集成材への加工を手掛ける石川県の会社から発注を受け、森林組合などと連携して節やねじれが少ない形の良い材を選んだ。「林業の未来につながればと思つて認証取得などに取り組んできた。県産材利用が決まった時は心が躍った」

佐久穂町出身。明治大卒業

3（昭和49）年に帰郷。同社の従業員として働いた後、98年に社長に就任した。当時は木材の

割合を示す「国産材自給率」は、2017年は36・1%。02年18・8%と比べると近年持

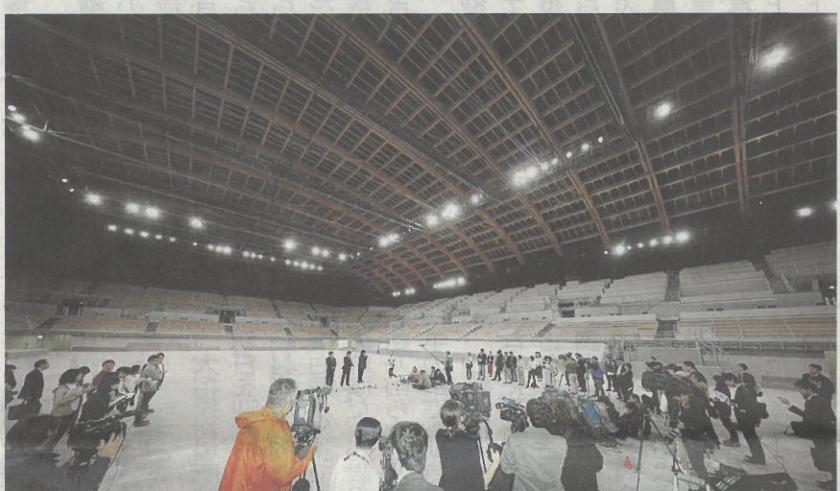
てきた資源が五輪で脚光を浴びるのはうれしい。有明体操競技場には、国産材の魅力を将来にわたって発信し続けてほしい」と期待している。

（吉野 貴哲）

信州産木材 発信の起点に



「吉本」の敷地内にある木材置き場で語る由井さん。
「五輪施設への県産材利用が決まった時は心が躍った」



完成し、報道陣に公開された有明体操競技場。梁に信州産カラマツを使った=2019年10月、東京都江東区

五輪関連施設の建設は、環境に配慮して管理された森林から伐採された「認証材」の利用が求められる。県産材を五輪施設に利用してもらうことを目指

将来の世代が木を身近に感じる機会を増やす必要がある」としている。

県内では戦後に植えられたカラマツが利用に適した樹齢に達している。ねじれが生じやすく節が多いことなどから利用が進まなかつたが、加工技術の向上などで、利用が注目されている。国産材の不遇の時代を知るだけに「大事に守り育てられてきた資源が五輪で脚光を浴びるのはうれしい。有明体操競技場には、国産材の魅力を将来にわたって発信し続けてほしい」と期待している。